

## 世代間交流としての子育て支援に関する研究 —祖父母世代の意識調査から—

### Study on Intergenerational Exchange through Child Rearing : An attitude survey of child rearing on grandparents

名須川 知子\* 上月 素子\*\* 井上 千晶\*\*\* 番匠 明美\*\*\*  
NASUKAWA Tomoko KOUZUKI Motoko INOUE Chiaki BANSYOU Akemi  
濱田 格子\*\*\*\* 新道 由記子\*\*\*\*\*  
HAMADA Sadako SHINDO Yukiko

本研究は、2011年の兵庫県における祖父母世代を対象とした子育て意識の調査及びその結果に基づいた2014年のインタビュー調査から、世代間交流としての子育て支援に関する祖父母世代の意識を明確に知り、その結果に基づいて、これからの子育て支援方策の示唆を得ようとするものである。子育て支援に関するアンケート調査やインタビュー調査を踏まえ、約6割の祖父母世代は、親族以外の子育て支援を望んでいるが、そのきっかけがないこと、また、その思いをもちながら自分からというよりも依頼されることを望んでいること、また、ふさわしい子育て支援ができるようなスキルを身につけたいと願っていることが明らかとなった。さらに、責任を担わず、気軽に出来ることで手助けをしたいという思いをもっていることが明らかとなった。少子高齢化を現代的特性として捉え、それぞれにとって双方向性をもった恩恵と世代継承を含めた理念を明確にして子どもをめぐる世代間交流の実現を考えていく重要性が明らかとなった。

キーワード：子育て支援、祖父母世代、世代間交流、子育てへの意識

Key words : child rearing, grandparents, intergenerational exchange, attitude for child rearing

#### 1. 問題と目的

現代の子育ての不安は、子育て世代の孤立であると言われている。また、祖父母世代である祖父母世代の孤立も多く語られている。ここでは「孤立」という共通して見出される言葉から、人間の成長の世代における切り離しによる問題が浮かび上がってくる。すなわち、都市化による核家族の子育て世代、祖父母世代化による独居老人問題等、現代の人的なコミュニティーの崩壊とも言える状況が次世代を育むという人間としての大きな課題となっている。子育て世代・祖父母世代双方の孤立をつなぐひとつの希望として「子どもをめぐる」という軸が見出されるのではないだろうか。そして、ここにこそ、地域コミュニティーを復活させ、次世代へとつなぐ方策が見出されるのではないだろうか。

現在の祖父母世代の意識について、内閣府（2015）平成26年度版高齢社会白書によると、祖父母世代の世代間交流について、約6割が若い世代との交流に参加したいと考えており、平成15年に比べると7.2ポイント増加していることが報告されている。しかし、この結果は、子育て支援に限定したものではない。

祖父母世代の子育て支援に関する研究について、これ

まで、本研究グループでは、アンケート調査による「世代間子育て支援に関する研究—祖父母世代の子育て意識調査—」（2011）やインタビュー調査による「世代間交流の活性化をめざした高齢者支援事業—子育て支援への参画を介して」（2014）を報告してきた。本稿では、それらの結果を再考し、祖父母世代による子育て支援への意識を明らかにし、地域の子育て支援施策の示唆を得ることを目的とする。

これまで、祖父母世代の子育て支援に関する先行研究としては、小川（2008）がシルバー人材センターの受託事業としての育児サービスに関する実践を報告し、子育て支援を介した地域コミュニティーの可能性を示している。また、内田ら（2012）は、高齢者の育児支援活動が心身の健康に効果があることを報告している。田淵ら（2013）は、エリクソンの発達課題に基づき世代を継承していく世代性について実証的に論考し、世代間交流行動の機会を作ることで世代性発達を促進する可能性を示している。大西（2013）は、祖父母世代が「自分自身の背景により、今子育て中の親世代へ何らかの助けを行いたいと思っている」一方、「子育て中の親子世代を学ぶ」必要性も感じていることを指摘している。具体的な支援

\*兵庫教育大学・人間発達教育専攻・幼年教育コース \*\*神戸常盤大学 \*\*\*夙川学院短期大学  
\*\*\*\*近大姫路大学 \*\*\*\*\*白鳳短期大学

内容として、わらべうたを中心とした子育て支援の意味について言及している。また、横川ら（2015）は、幼稚園での子育てひろばにおける兵庫県の「まちの寺子屋師範塾」の事例から、祖父母世代の気づきから、地域の子育て支援活動へのつながりのための契機としての場の必要性と双方の世代を繋ぐ役割の重要性を示している。

以上のように、子育て支援にかかわる祖父母世代の意識についての研究から場の設定ときっかけについての必要性を示唆されている。そこで、本研究では、まず現代の祖父母世代は子育てについてのどのような意識をもち、考えをもっているのか、その点を明らかにし、少子高齢化における今後の子育て支援の方策の一助とすることを目的とする。

## 2. アンケート調査

### (1) アンケート調査の方法

平成23年度兵庫県子育て支援調査研究事業の委託によるアンケート調査をおこない40才以上を対象として調査用紙を兵庫県全県にわたり2082通配布し、1462通回収した。回収率は、70.2%である。

アンケートは大きく次の5つの内容、34問から構成されている。内容は、(1)年齢や生きがい感など回答者の現在の様子についての設問、(2)回答者のこれまでのボランティア活動等についての設問、(3)現在の子育て環境について回答者の考えを尋ねる設問、(4)回答者の孫とのかかわりについて尋ねる設問、(5)回答者とその家族についての設問である。また、自由記述として、「親と祖父母の立場の相違」「支援関係で良好な関係を築くための工夫」「子育てについて日頃思うこと・見聞きして思うこと」についてそれぞれ項目を設けて記述する方法をとった。対象は表1のとおりである。

表1-1 年齢別

	件数 (人)	割合 (%)
40歳代	78	5.4
50歳代	181	12.4
60歳代	638	43.9
70歳代	444	30.5
80歳代	57	3.9
90歳以上	1	0.1
無回答	55	3.8
合計	1454	100.0

表1-2 性別

	件数 (人)	割合 (%)
女性	979	67.3
男性	425	29.2
無回答	50	3.4
合計	1454	100.0

### (2) アンケート調査の結果

#### ①ボランティア活動の参加について

ボランティア活動への参加について、複数回答可としてたずねた結果は表2のとおりである。

表2 ボランティア活動の参加状況

ボランティア活動内容 (1454人)	参加件数 (件)	参加割合 (%)
自治会・町内会活動	884	60.8
高齢者支援の活動	485	33.4
まちづくり活動	415	28.5
子育て・育児の支援活動	362	24.9
防犯・生活安全活動	339	23.3
文化伝承・スポーツ復興活動	314	21.6
民生委員・児童委員の活動	314	21.6
障がい児(者)支援の活動	279	19.2
自然・環境保護活動	269	18.5
その他	128	8.8
合計	3789	260.6

ボランティア活動（個人・団体どちらでも）等への参加について、子育て・育児の支援活動は24.9%となっている。多くは、60.8%が自治会や町内会での活動、続いて33.4%が高齢者支援の活動に参加している。また、用意した選択肢いずれに関しても、20%前後がその活動をしていると回答している。これらの結果から、一人の回答者が複数の活動をおこなっていることがうかがえる。

また、兵庫県で実施している子育て支援関係の活動の認知については以下のとおりである。

表3 兵庫県における活動への認知 (%)

講座名称	詳しく 知っている	それなりに 知っている	あまり 知らない	まったく 知らない	無回答
「ファミリー・サポート・センター」という子育て支援事業	8.5	29.5	25.9	30.3	5.8
兵庫県の「まちの寺子屋師範塾」という子育て支援事業	2.3	12.9	29.8	47.8	7.2
兵庫県の「ひょうご絵本の伝承師」という子育てに関する養成講座	1.4	7.6	26.8	56.1	8.0

これらのことから、「ファミリー・サポート・センター」については、38%の人が知っているが、兵庫県で独自に実施している子育て支援事業である「まちの寺子屋師範塾」や「ひょうご絵本の伝承師」は約70%の人が知らないという回答であった。

#### ②現在の子育て環境について

祖父母世代が感じている現代の子育て環境について、子育ての難しさを感じているのか、また、昔と今の子育て環境が変化しているのかについていずれも一つだけの選択で尋ねたところ、表4、5の結果が得られた。

表4 昔と比べて子育ての難しさを感じるか

	件数 (人)	割合 (%)
大変そう思う	463	31.8
少しそう思う	530	36.5
あまりそう思わない	243	16.7
わからない	65	4.5
変わっていない	46	3.2
まったくそう思わない	43	3.0
無回答	64	4.4
合計	1454	100.0

表5 昔と今の子育て環境の変化 (%)

選択肢 子育て環境の内容	方 が 当 て は ま る					無 回 答
	自 分 た ら の 頃 の	現 在 の 方 が 当 て は ま る	以 前 も 現 在 も か わ ら な い	わ か ら な い	無 回 答	
a. 子育てにお金がかかりすぎる	4.0	<u>59.1</u>	21.7	6.5	8.7	
b. 安心して子どもを遊ばせる場所がない	4.5	<u>65.6</u>	16.7	4.1	9.1	
c. 親の労働時間が長くて子育てに時間をかけられない	9.7	<u>40.0</u>	29.3	10.5	10.6	
d. 母親ひとりに子育ての負担がかかっている	31.6	15.9	<u>34.9</u>	7.4	10.2	
e. 社会全般が子育てに対して理解がある	12.7	<u>43.0</u>	23.5	9.4	11.3	
f. 仕事と子育ての両立が難しい	18.1	23.4	<u>40.1</u>	8.6	9.8	
g. 子どもを保育所に入れにくい	8.7	36.6	19.1	24.3	11.3	
h. 子どもに対する家庭のしつけ力が低い	2.6	<u>68.6</u>	12.4	6.3	10.0	
i. 子どもに対する地域社会のしつけ力が低い	2.9	<u>67.8</u>	12.7	7.1	9.6	
j. 気軽に子どもを預けられる人や場所が多い	23.9	28.3	18.1	20.2	9.6	
k. 子どもを社会で育てるという雰囲気がある	29.9	23.7	19.3	17.9	9.3	

表4の「大変そう思う」(31.8%)と「少しそう思う」(36.5%)をあわせ、7割近くの人が、今の子育ては、以前の子育てをしていた頃(自分たちが子育てしていた時代)よりも大変そうだと感じていることが分かる。

また、表5の子育て環境の変化について、現在の方が当てはまるものとして、「h. 子どもに対する家庭のしつけ力が低い」(68.6%)、「i. 子どもに対する地域社会のしつけ力が低い」(67.8%)のように、「しつけ力の低さ」に関する項目が多く選択されている。また、「b. 安心して子どもを遊ばせる場所がない」(65.6%)、「a. 子育てにお金がかかりすぎ」(59.1%)が続いている。さらに、「e. 社会全般が子育てに対して理解がある」(43.0%)という現代的な特徴と同時に、「c. 親の労働時間が長くて子育てに時間をかけられない」(40.0%)と感じている人も比較的多い、という危惧を抱いていることがわかる。

一方、昔と変わらないこととして、「f. 仕事と子育ての両立が難しい」(40.1%)や「d. 母親ひとりに子育ての負担がかかっている」(34.9%)が見られ、子育てにおける問題が時代が変わっても不変であることも明らかになった。

### ③子育て支援参加について

祖父母世代の子育て支援についての考え方として、支援そのものをしてほしいのか、という点で「親族以外で子育て中の方がいれば、手伝いたいと思いますか」という質問を行った。その結果は表6のとおりである。

表6 親族以外の子育てを手伝いたいと思うか

	件数 (人)	割合 (%)
大変そう思う	94	6.5
少しそう思う	444	30.5
あまりそう思わない	409	28.1
まったくそう思わない	131	9.0
すでに手伝っている	117	8.0
わからない	163	11.2
無回答	96	6.6
合計	1454	100.0

このように、「大変そう思う」(6.5%)と「少しそう思う」(30.5%)をあわせると37%の人がそのように感じていることがわかる。

次に、すでに子育て支援に関わっている人117名に、親族以外の子育てを手伝おうと思った理由について、すべてあてはまるもの複数回答を選択してもらったところ表7のようになった。

表7 子育て支援に参加した理由

動機(複数回答可)	回答数(件)	当てはまる(%)
子どもと関わりたい	49	41.9
社会参加・交流	48	41.0
何かをしたかった	45	38.5
子育て経験を生かす	43	36.8
困っている人をみた	31	26.5
思い出して関われる	28	23.9
資格を生かす	15	12.8
収入のため	10	8.5
その他	17	14.5
無回答	2	1.7
合計	288	246.1

この結果から、「子どもと関わりたい」「社会参加や交流したい」「何かをしたかった」「子育て経験を生かす」という思いが多くみられることがわかった。

また、すでに子育て支援を実施している人以外の1337名に子育て支援に参加が出来ない理由についてあてはまる理由のすべてを複数選択してもらった結果が表8である。

表8 子育て支援に参加できない理由

理由(複数回答可)	回答数(件)	回答割合(%)
参加する時間がない	322	25.9
アクシデントがおこると面倒	288	23.2
きっかけがない	465	37.5
親がすること	155	12.5
情報がない	111	8.9
関わりが苦手	72	5.8
世話の経験がない	56	4.5
その他	140	11.3
無回答	65	5.2
合計	1674	135.0

この結果から、「きっかけがない」が37.5%と最も多くあり、あとは、「参加する時間がない」、「アクシデントがおこると面倒」といった理由が続く。

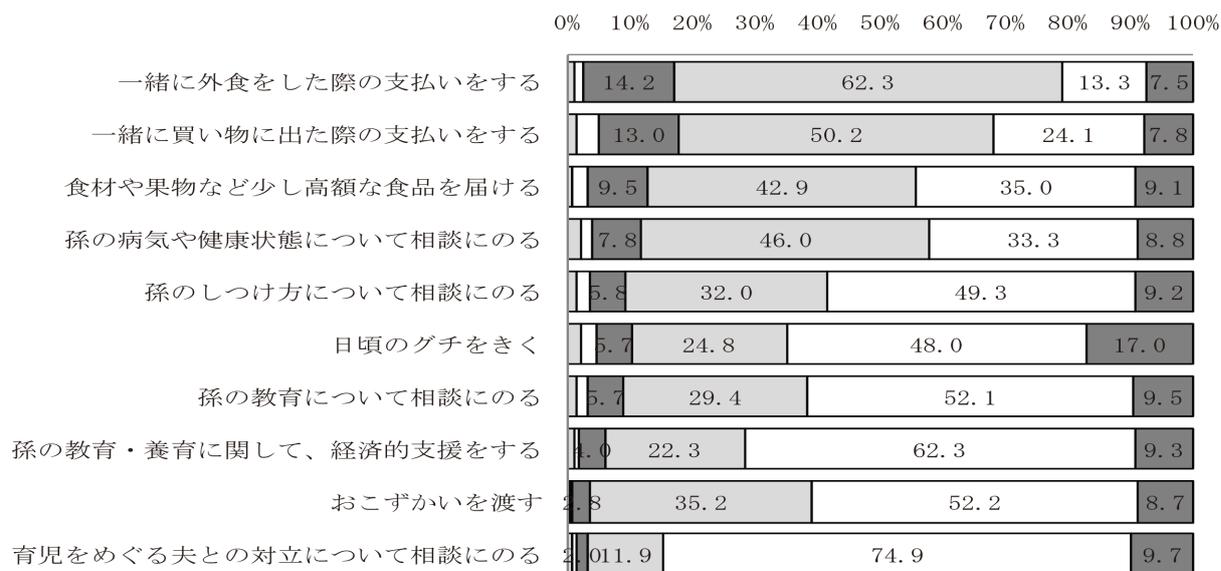
以上のことから、子育て支援への関心と意欲はあるにも関わらず、支援をするきっかけがない、という状況が明らかとなった。しかし、兵庫県でも祖父母世代が子育て支援事業に関わる方策を打ち出しているものの、認知度が低く、十分機能していないことも明らかとなった。

#### ④孫や子ども（親世代）との関わりについて

次に、祖父母世代が親族への子育て支援としてどのように感じているのか、子育て中の孫の親に対してしていることは、どのようなことで、どれくらいの頻度でおこなっているかを、実際に「孫がいる」と答えた965人を対象にたずねた。選択肢は、「一緒に買い物に出た際の

支払いをする」「一緒に外食をした際の支払いをする」「おこずかいを渡す」「食材や果物など少し高額な食品を届ける」「孫の教育・養育に関して、経済的支援をする」「孫の教育について相談にのる」「孫のしつけ方について相談にのる」「孫の病気や健康状態について相談にのる」「育児をめぐる夫との対立について相談にのる」「日頃のグチをきく」の10項目であった。また、この10項目についてどれくらいの頻度でおこなっているか、あるいはおこなってきたかについて「一週間に三回以上」「一週間に一回程度」「一ヶ月に数回程度」「年に数回程度」「ほとんどいない」という選択肢から選ぶように求めた。結果は図1のとおりである。

ここにみられるように、関わり回数として、「一週間に三回以上」あるいは「一週間に一回程度」という頻度の高い選択肢はほとんど選ばれず（全て5%未満）、関わる回数は相対的に少なかった。関わり方については、「一ヶ月に数回程度」では、「一緒に外食をした際の支払いをする」が14.2%、「一緒に買い物に出た際の支払いをする」が13.0%であり、一緒に時間を楽しむ項目が他の項目よりも相対的に高い割合となっている。「年に数回程度」という頻度においても、「一緒に外食をした際の支払いをする」が62.3%と最も高い割合であり、続いて一緒に買い物に出た際の支払いをする」50.2%、「孫の病気や健康状態について相談にのる」46.0%、「食材や果物など少し高額な食品を届ける」42.9%、「おこずかいを渡す」35.2%、「孫のしつけ方について相談にのる」32.0%、「孫の教育について相談にのる」29.4%、「日頃のグチをきく」24.8%、「孫の教育・養育に関して、経



□一週間に三回以上 □一週間に一回程度 ■一か月に数回程度 □年に数回程度 □ほとんどない ■無回答

図1 子育て中の親世代（親族）への関わり方とその頻度

済的支援をする」22.3%、「育児をめぐる夫との対立について相談にのる」11.9%であった。ここで、「孫のしつけ方について相談にのる」や「孫の教育について相談になる」については、「ほとんどない」という回答がそれぞれ49.3%、52.1%である。以上のことから、親世代は祖父母から経済的な支援は受けている一方、しつけや教育に関することでは相談をしていないことがわかる。

次に「孫世代と支援関係で良好な関係を築くための工夫」として自由記述でたずねたところ、以下のような結果であった。

- 「息子の孫の為、姑の私は一切口を出さない。」
- 「必要以上口に出さない。自分自身がしっかり自立したおばあちゃんになる。」
- 「いちいち口出しはしない。たのまれればいやな顔をせず引き受ける。但し意見を聞かれればアドバイスする。」
- 「あまり口に出さない、価値観を押しつけないこと。」
- 「嫁の生活に対して何も云わないこと。(中略)車に乗せてもらうときは、ガソリン代としてお金を渡す。外食のときもお金をはらう。」
- 「求められた時だけかかわる。」
- 「頼まれた時には気持ち良くOKをします、という風に心がけています。つかず離れずで距離を置く。余計な口出しはしない。」
- 「必要以上にかかわらず、つかず、離れずの状態を保っている。」
- 「頼まれなければ、一切、口も手も出さないが、頼まれれば精一杯の事はしてやるようにしている。」
- 「相手の育児方針を尊重し、あくまでもサポートである事を自覚する。」

図1とこの自由記述からもわかるように、祖父母らは親族の孫世代の親、すなわち実の子どもに対しては、経済的な支援は行いが、余計な口出しはせず、頼まれれば喜んで対応する、といった様子が伺われる。

### 3. インタビュー調査

#### (1) 手続きと対象

アンケート結果を受け、主に祖父母世代の子育て支援の意識の有り様について、インタビュー調査を実施した。対象は、近畿圏内に居住している、あるいは勤務している50～80歳の合計50名（男性19名、女性31名）の対象者に、インタビュー内容として、①子育て支援を実施している方に、実施しているきっかけは何ですか。②今の親御さんの子育てについて、どのように思いますか。③今の親御さんの子育ては大変だと思いますか。④お孫さんのいる方に、ご自分のお孫さんと他の子どもに関わる違いはありますか。⑤どのようにして、祖父母世代が子育て支援をできると思いますか。⑥子育て支援はボランティアでいいと思いますか。という6点について尋ねた。なお、倫理的配慮として、本人が特定されないこと、本研究以外には利用しないことを明示し、録音は、相手の許可が得られた場合に実施した。

各年齢・性別のインタビュー者は以下の表9のとおり

である。

表9 インタビューの年齢・性別 (人)

	男性	女性	計
50歳代	4	14	18
60歳代	11	13	24
70歳代	3	2	5
80歳代	1	2	3
合計	19	31	50

#### (2) インタビュー結果

##### ①子育て支援に関する意見

祖父母世代の子育て支援に関するインタビュー結果について、祖父母世代自身の「現代の子育てについて」の見方や「子育て支援への関心について」、そしてこれからの「子育て支援の方策」の提言を表10にまとめた。

表10 子育て支援に関する意見

	現代の子育てについて	子育て支援への関心	子育て支援の方策
情報	・情報が多くてかえって不安になる ・情報過多で何が必要か選択するのが大変	子どもが好きなので、関わりた も が い	場 所 の 設 定 人 の か き り 参 加 の き つ か け づ く り に 待 遇
地域・安心	・外で十分遊ばせない ・地域に安心して遊べるところがない ・犯罪に巻き込まれる危険性がある ・地域との関係は希薄である ・夫婦単位の子育てで、近所のかかわりが少ない	好 き 好 き ・子育てをお手伝いできるようになりたい ・自分の子育てを振り返って支援したい ・時間ができたら手伝いたい ・直接は難しいが裏方ならしたい 母 親 支 援	・多世代が自然にかかわるような場所をつくる ・地域単位で人が集まれる場所をつくる ・子どもを遊ばせながら茶話会のような自然体の場を ・近所で顔見知りの場所がいい ・子育てしやすい環境に、セフティーネットとなるような支援を ・不安に対応できる行政を ・教育は親がして、年寄りは見守るという役割を ・お互い様という気持ちを双方がもつ ・子育ての必要な人とした人をつなぐ「人」 ・丁寧に子どもに手をかけてあげたい ・きっかけづくりを考える ・具体的な募集、声かけ ・緩やかな登録で高齢者が気軽に参加できる仕組みを ・回覧板での応募情報収集 ・見学から受け付ける ・自分からは言にくいので友人等から声をかけてもらう ・自由参加形式で参加可能に ・支援者の待遇改善
自然体の子育て	・自然体の子育てが難しい ・子育てに神経質になっている ・求めれば社会的援助が受けやすい ・自然なサポート体制がない ・子育て自体がストレスになっている ・親自身が心豊かに向き合っていく にくい	・子どもと一緒にすることの楽しさを伝えたい ・子育てで孤立している人に声をかけたい ・かかわりのモデルになれたらいい ・お母さんからの感謝がうれしい	
世代交流	・母親の役割が重くなっている ・経済的苦労がある。	世 代 交 流 難 し い	
親の態度	・接し方知らない ・子どもへの目が厳しい ・自分の子どもだけを見ていない ・しっかり向き合っていない	・小さい子はこわい ・かえって迷惑をかけたら、と思ってしまう	

この表から、祖父母世代が思っている現代の子育てについては、情報が多くあり、かえって不安、混乱を呼び起こし、地域での安心や地域性に薄く、なかなか自然体の子育てが出来ない状況で、子育てがストレスになって

いる、というように子育てが難しい状況を認識していることがわかる。さらに、親自身も子どもとの接し方も知らず、自分の子どもだけを見ている「我が子主義」であったり、しっかりと我が子とも向き合っていない状態であったりするという意見もあった。

そこで、子どもへの関心もあり、何とか支援をしたいという思いはあり、母親支援や世代間交流での社会支援を望む一方で、責任が重く、迷惑をかけることになるのでは、という消極的な意見もあった。しかし、子育ての親子を自然なかたちでサポートしたいという思いが多くあり、各祖父母世代に見合った様々な形での応援の方法が示唆された。それらを整理すると、自然な出会いをつくれる場所の設定や、子育てする人と支える人をつなぐ人の設定や双方の役割の相違をもつこと、子育て支援に参加したいが、そのきっかけがないという点は、アンケートにも共通に見られた。以下にその点について見てみよう。

## ②子育て支援のきっかけについて

### a. 声をかけてほしい

「知り合いから声をかけてもらって入りやすい、知り合いがいると安心」(50歳代女性、60歳代女性、60歳代男性)

「個別の依頼があった方が出やすい。」(60歳男性)

「(基本はしたくないけど、)こんな人があるけど、こんなことしてもらえる? そうすると、できる、できない、と考えていける」(60歳代男性)

「頼まれたらしましょうか、という感じ。支援ルームで〇〇のことをしてもらいたい。それを募集して、(どんな風にするのか)見学にも来てみてくださいなど」(50歳代男性)

「隣の児童館がボランティア募集とか出してもらう。自分からは言いにくい。」(50歳代女性)

「一人では行き難いが、近所で誘ってくれる人がいると、自然に行ってみようかなと思える」(70歳代女性)

「大きな組織で顔も知らない人の中には出て行きにくい。自分だけがこれをやりましょうとは言にくい。住んでいる隣近所で、こんなことをしてみましょうかと声かけをしてもらって、何をどんな風にといい、みんなでの取り組みを具体的に示してもらえると、じゃあ私はこの時間にお手伝い出来るよ(80歳代女性)」

「発起人とかが声をかけてくださる人があるとよいかも。自分からは難しい。緩いかたちで始めるとしやすい。」(60歳代女性)

「自分からオーガナイズするというほどの積極性はないので、できること—絵本やお話しを読むとか、お菓子を作る—を登録しておいて、声をかけてもらうのがいい」(60歳代男性)

このように、参加したい気持ちはあるが、自分から一人で、ということは難しく、知り合いに声をかけてもらったり、具体的な方法を提示してもらったりすることで、参加しやすくなることがわかる。

### b. 特性・専門性を活かしたい

「祖母がいなくてお母さんはやはり大変なので、そういうおばあちゃんがわりになれるような関係を作れたらよいか」(80歳代女性)

「地域でリタイアされた方の、その道でのプロの技術や知識が活かせる活動があるとよい」(60歳代男性)

「子育て支援に関わる講座の受講したことがきっかけになった」(50歳代女性)

「今回は子育て師範塾をやっているというのをインターネットで見つけて募集したので、よききっかけとなったと思う。」(60歳代女性)

「師範塾での近くで行けそうだったし、50歳以上の募集がよかった。これまでの学童の指導員の経験が役立つと思った。」(60歳代女性)

「自分の磨いてきたスキルを生かせるような特化したことなど。具体的な問いかけなどがあれば、自分の持っているものを活かしてやっていけるかも。」(50歳代男性)

「子育て支援に関わる前に、自分の力をつけるような場があると助かる」(50歳代女性)

このように、祖父母世代という立場・経験、そして講座等で培った力を是非活用して、あるいは子育て支援に関する力をつけて役立てたいという意見があった。自分の専門性や経験が活かせるという積極的な理由で活動に参加した人が多いことからわかる。実際に行っている活動内容についても、つどいの広場や一時預かり、親子イベントの講師などの子育て経験や保育等の専門性が必要とされる場合が多いという意見もあった。

### c. その他子育て支援の方策として

「地域の小学校区でそういうボランティアの人材バンクを作るとか、あるいは町内会で人のリストを作るなど地域の力を生かしてやっていけるシステムを作るとよい」(50歳代女性)

「回覧板などで募集の案内を回して参加者を募る」(60歳代女性、60歳代男性、70歳代女性、80歳代男性)

以上のように、回覧板等で募集をして登録する方法が具体的に示されたが、以下のように、その他子育て支援の場を設置して、自由に入出りできる方策も提示された。

「第一歩を踏み出すのはすごく難しい。たとえば、地域の民生委員などから(声をかけてほしい)。自分のやっているボランティアなどに友人も取り込んでいきたい。同じ年齢層同士での集まりのようなものにしたい。」(50歳代女性)、

「団地などでは自然発生的に生まれて、自分の子と一緒に預かってもらえることがあった。そういうつながりがない場合、固い組織でなく緩やかな…。」(60歳男性)

「子どもを遊ばせながら、茶話会などに発展して…公園などお父さんたちのつながりがばらばら出ていくのがよいのでは…子どもが小さい頃は団地でそういう事がやりやすかった」(50歳代男性)

「マンションなどではみんなが集まれる場所ですこに行けば必ず誰かがいるよというような所(をつくる)。マンションの内部だとやりやすいかもしれない。人間の関係が疎遠になって、かかわらないでおこうになっているので、手を出してもいいのかしらとか、面倒なことになったら困るとかになってしまっている。地域で何か出来るよ。マンションなどでは祖父母世代用に何日の朝ごはんをみんなでお母さん。そういうところに小さい子どもを育てているお母さんも参加できると、心配なことを相談したり、おしゃべりもできる」(60歳代女性)、

「祖父母世代の出来る場をつくってもらえれば、時間など指定せず、

体調が許す時に自由に参加のような形式でもらいたい。」(80歳代女性)

「テーマがはっきりしていると参加しやすい、地域活動も毎回と言うとしんどいので、テーマごとにスポット的に参加するという形も考えられるのではないか」(60歳代男性)

「保育所や小学校も含めて、祖父母が自由にとまではいかなければ参加できるような、地域で寄ってたかって応援するようなものが、頻繁にあるといい」(60歳代男性)

#### 4. 考察

兵庫県内では、社会的な子育て支援に関わりたいたいと考えている祖父母世代が4割以上おり、潜在的なニーズが高いことが明らかとなった。これは、内閣府の報告にもあるように、年々増加することが予測される。このような人々を対象に世代間交流を含めた子育て支援について、少子高齢化の現象をふまえた政策が本格的に考えられる時期にきているのではないかとと思われる。このように、今の子育て環境については、祖父母世代のいずれもが情報は少なくとも、世代間で協力しあえた昔に比べて、現代は大変子育てし辛い状況であり、子育ての難しさを祖父母世代も認めており、出来る範囲で何とか支援をしたいという気持ちを知ることができた。

一方、そのような祖父母世代のパワーを十分活用していない実態も明らかとなった。また、我が子の孫については、直接口出しをすることがはばかれる場合もあり、自分の孫ではなく、社会的な子育て支援に参加するという点が円滑な支援であるとも言える。先行研究からも子どもに関わることは祖父母世代にとっても生き甲斐やエンパワメントになるといった指摘もあり、幼い子どもをめぐって子育て世代とかわる重要性があろう。これまでのインタビューからも、子育て支援を経験した方は、子どもから与えられる喜びが生きがいになっていることがわかった。

さらに、子育ての親子を自然なかたちでサポートしたいという思いが多くあり、各祖父母世代に見合った様々な形での応援の方法があることが示唆された。そのためには、システムとして、子育て支援したい祖父母世代と子育てを必要とする子育て中の親子をつなぐファシリテーター的な機能をもった人材が必要であることも明示された。具体的には、情報の公開、人材登録システムをさらに身近なものとして気軽に活用できるようにし、声をかけて、緩やかな形での参加ができることを考慮する必要がある。また、参加のきっかけとして、回覧板等を利用した声かけや登録方法といった自由な参加形式を望んでいることも明らかとなった。また、支援する側がより技術を向上したり新しい取り組みを望んだりした時に、例えば行政等が仲介となることも必要であろう。その手立てとして、出会いをつくれる場所の設定や、子育てする人と支える人とをつなぐ人の設定が必要とされる。この

ような場の提供や祖父母世代と子育て支援をつなぐ人といった課題は、以前から指摘されているが、さらに祖父母世代が参加しやすいように実際に声をかけ、仲間とともに子育て支援事業に参加できるような気軽な雰囲気づくりが必要であろう。さらに、子育て支援のスキルアップも含めた祖父母世代を対象とした「地域子育て支援講座」等を積極的に提供することが必要である。これは、核家族や地域の喪失で失われてきた世代継承を実現するものとしての地域コミュニティの創設を示唆するものである。すなわち、身近な地域の子どもたちとの関わりをとおして、子育てに参加し、地域資源としての世代間子育て力や多世代による子育て力が形成されていく必要性があり、子育て支援を「世代間交流をとおした継承と創造」の場として捉えることが重要であろう。今後、さらにその方策について考えていきたい。

#### 5. 引用文献

- 名須川知子・新道由記子・濱田格子・井上千晶・番匠明美・上月素子(2011)「世代間子育て支援に関する研究—祖父母世代の子育て支援調査」『兵庫県子育て支援調査研究事業』ひょうご地域子育て支援大学間連絡協議会 pp.99-127
- 名須川知子・新道由記子・濱田格子・井上千晶・番匠明美・上月素子(2014)「世代間交流の活性化をめざした高齢者支援事業—子育て支援への参画を介して」『調査・研究報告集』大阪ガスグループ福祉財団 pp.7-16
- 内閣府(2015)『平成26年度版高齢社会白書(全体版)』平成27年4月21日取得 <http://www.8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2014/zenbun/26pdf> pp.34-38
- 小川圭子(2008)「地域子育て支援活動に関する実証的研究—シニアの子育て支援を手がかりに—」『幼年児童教育研究』兵庫教育大学幼年教育コース紀要 pp.27-35
- 大西もよ(2013)「子育て支援における祖父母世代に関する研究—子育て支援者講座を通して—」『兵庫教育大学大学院修士論文』pp.66-68
- 田淵恵(2008)「地域の祖父母世代の子育て支援動機に関する質的研究」『生老病死の行動科学 13巻』pp.33-43
- 田淵恵・三浦麻子・中川威・権藤恭之(2013)「祖父母世代における世代性(Generativity)と次世代との関わり行動の因果関係 性差に着目した検討」(2013)『日本世代間交流学会誌』3巻 pp.35-40
- 内田勇人・藤原佳典・西垣利男・香川雅春・作田はるみ他(2012)「高齢者による育児支援活動が祖父母世代の心身の健康と母親の育児ストレスに及ぼす影響」『日本世代間交流学会誌』2巻 33-39頁

横川和章・名須川知子・大西もよ（2015）「子育て支援  
における祖父母世代のかかわりに関する研究－実践で  
学ぶ「まちの子育て師範塾」の事例から－」『兵庫教  
育大学研究紀要』46巻 pp.21-30